

【要約】

本研究では、北宋時代の三蘇、即ち蘇洵及びその二子である蘇軾・蘇轍兄弟の經學著作に即してその思想的特色を分析した。各章の分析より明らかになったことを述べれば以下の通り。

序論は本研究の前提となる問題として、經學はただ經書の文字を機械的に解讀するものではなく、解釋者が置かれた社會状況、そこから導かれる問題意識と強く結びつきながら主観的な營爲として行われるものであることを論じた。

その上で、北宋という時代は貴族政治の崩壊という前代の出來事を承けた士大夫政治の確立という巨大な社會變動に接しており、その時代を生きた士大夫による經書解釋は宋代に特に際立つ問題意識、即ち經學の統治への應用及び修養への展開を軸に進められていったことを述べた。本研究は特に三蘇の經學を對象として取り上げるため、宋代經學の流れに在って三蘇の經學の特質をどう考えるべきなのか、という問題に答えるべく、本研究上で取り上げるべき三蘇經學著作の諸論點を整理した。

第一章「蘇軾の『周易』解釋に於ける爻への注目及び整合性の追究」は、蘇軾の手により完成した『周易』注釋書『東坡易傳』について、爻位・爻間關係を手がかりにその解釋の特徴を明らかにした。

『周易』經傳の文義を読み解こうとするに当たって、一卦を構成する六爻の位置や、爻と爻との間の關係性に意味を見出そうとすることは、漢代以來一般的な思考であった。しかし、そうした爻位や爻間關係が『周易』に於いてもつ意義を、蘇軾は從來の解釋、特に當時權威を有していた王弼・韓康伯注や孔穎達疏と比して際立って重視していたことは、蘇軾自身の、そして晁公武・馮椅ら後世の學者たちの認めるところである。爻位・爻間關係から一卦全體を理解しようとする傾向がとりわけ鮮明なのは、蘇軾が卦全體を婚姻を軸にして説明しようとする場合であり、蘇軾以前、また、同時代やそれ以降の諸注釋と比較しても獨自性が際立つ。

爻位・爻間關係が一卦の中で有する意味に蘇軾が殊更に着目した、という現象について、筆者がその背景として見出したのは、蘇軾以前の義理易の「數」への關心の低さに對する蘇軾の危機感である。王弼・韓康伯・孔穎達による『周易』注釋は、漢代象數易の恣意性に反對し、經傳の文義から聖人の教えを読み解くことを重んじたが、その結果、經傳の文を行文に即して理解すべき文章として捉える向きが強くなり、經傳中に繰り返し登場する術語への理解が全書を通じて一貫していない場合がある。それに対して蘇軾は、「凡」の語を用い

て『周易』の中の術語を定義しようとしばしば試みた。

「凡」字を用いた部分以外についても、たとえば、大有等の卦名に含まれる「大」字を「陽」と解する説や、謙卦六二爻辭等に見える「鳴」字を爻と爻との関係から陰陽の唱和と解する説など、蘇軾が爻位・爻間関係に基づいて注疏の説を大きく改める場合、それはその單獨の經傳の文義を明らかにしようとしたのではなく、『周易』一書に於ける他の同等表現を広く視野に捉えたものである場合が多い。

蘇軾は父・蘇洵の『周易』觀を受け継ぎ、『周易』を理解するためには「數」に着目しなくてはならない、という強い意識をもっていた。『東坡易傳』に示されている上述の蘇軾の態度は、象數易の「數學」を學んで義理易にそれを統合しようと考えた蘇軾の『周易』觀を如實に示すものである。蘇軾以降の『周易』學は、程頤『易傳』と朱熹『周易本義』との差異などからもわかるように、經傳に込められた教えを第一とする義理易と、『周易』の占筮の書としての本來の役割を重んじて爻位など經傳の文字以外の要素を重視しようとする象數易との間を揺れ動き続けた。『東坡易傳』が義理易を基礎として經傳の文への理解を重視しつつ、『周易』一書に通じる法則性の確立に挑んだ點は、宋人の合理精神の發露である。また、『周易』解釋史に於いて義理・象數二派の統合を圖った點からは、純粹な象數易學からの轉換という、南宋『周易』學に繋がる問題意識を先取りした先驅性を見出すことができる。

第二章「蘇軾の『尚書』解釋の意圖及び經學史上の位置」は、蘇軾による『尚書』注釋書である『東坡書傳』が『尚書』及び先行する注釋へのどのような問題意識の元に執筆され、どのような特徴をもつのか、ということ、その經學史に於ける位置づけと共に明らかにした。

『東坡書傳』は従來その説の斬新さに注意が向けられてきた。『東坡書傳』にそのような斬新な説が多數含まれることは事實だが、『東坡書傳』の經說について注意深く調べると、それらは必ずしも蘇軾の獨創に係るものではなく、多く注疏の説や近い時代の王安石や孔平仲らの經說を取り入れて作り上げられている。『東坡書傳』の經學上の特徴として、獨創と竝べて注意せねばならないのは、その博搜である。

しかし、諸注釋を折衷しつつ自説を示したとも見られる『東坡書傳』だが、そこに一貫する問題意識が存在することは重要である。蘇軾は士大夫が政治に參劃する宋という時代に在って、自らが政治の場で如何に實踐するか、という觀點から『尚書』を解釋した。『尚書』は古代の君臣の言葉を記録した書物という性格から、その内容はとりわけ政治と深く関わっており、爲政者、とりわけ天子に對して鑑戒を示してきた。蘇軾は、宋代に至って政界で主要な役割を擔った士大夫の一人として、『尚書』を自らの考える理想の政治の在り方を示すものと位置づけ、臨場感のある解釋を提示しようとしたのである。

その師に当たる歐陽脩の思想と強い影響関係をもつ人情の經書解釋への導入や、恤民的な解釋を導入しようとする傾向、盤庚等に見られる王安石の政治姿勢に對する批判など、

『東坡書傳』に特徴的な經說の多くは宋代の士大夫政治の状況と密接に結びついている。

『尚書』の注疏は難解な『尚書』經文を平易に説くことには成功しているが、蘇軾はそれに満足せず、現實政治への應用という觀點から『尚書』を讀み直した。その經說は多く南宋の蔡沈『書集傳』に採用され、その結果、蘇軾の説が後の解釋の標準となったところも少なくない。この意味で『東坡書傳』は經學史上重要な位置を占めるのだが、『書集傳』に吸収される過程で蘇軾の現實政治に向けられた強烈な指向性は薄められていった。『東坡書傳』は北宋後半という儒學の議論が政治と極端に強く結びついた時代と、蘇軾の個性とが結びついた結果生まれた經學著作だったのである。

第三章「蘇軾・蘇轍の「思無邪」解釋」は、もと『詩』の一節で、『詩』三百餘篇全體の性質を示すものと『論語』の中で言及された「思無邪」について、蘇軾と蘇轍との解釋を比較し、その背景に存在する思考の差異を明らかにした。

北宋の思想界では、性善說の立場から、善である未發の性への回歸を唱える李翱の説が大きな話題となっていた。この説は後に道學に強い影響を與えることとなるのだが、李翱は情を取り除いて未發の性へと回歸するための手段として「思無邪」を擧げている。蘇軾兄弟は、李翱の議論から影響を受けながら、この「思無邪」についてそれぞれ独自の解釋を行い、經學著作や散文作品の中で見解を表明している。

蘇軾は未發の状態への回歸を目指すことを「土木」と呼んで理想視せず、精神が作用して情が生まれた後であっても「邪」が生じない状態のことを「思無邪」と考えた。また、その状態に至るために必要な方法として、書を讀み盡くし、考え盡くすことを『楞嚴經』から着想した上で提唱している。一方で蘇轍は、自らの『論語』注釋に於いて、「思無邪」の解釋に佛說を導入せずあくまでも儒家思想の範疇に於いて解決することを圖った。そこには、蘇軾に見られる復性說への拒絶は見受けられず、直接性善說に同調することを避ける一方でむしろ復性說に近い論理展開を示している。

三蘇の思想を研究する上で重要な課題となるのは、彼らの思想上の異同である。その「五經論」に歸屬の問題があることなどからわかるように、彼らの思想は蜀學という一つの枠で論じられるほど近似しており、三人の個性を明確にすることはきわめて困難である。この問題については曾棗莊氏が「蘇軾兄弟異同論」(『三蘇研究——曾棗莊文存之一』(巴蜀書社、一九九九年)所收)に於いて解決を試みており、『論語』解釋に兄弟の相違點が見られることについては指摘しているのだが、思想の差異の詳細やその背景に踏み込むには至っていなかった。この第三章では、先行研究の問題意識を承け、「思無邪」を繞る兩者の思考の相違を元に蘇軾と蘇轍との思想上の相違點とその背景を明らかにした。蘇軾兄弟の思想は、性善說に對する懷疑という共通點をもちながら、一方では佛說を用いた儒家經典の容認、一方では復性說的論理の導入と、異なる手法による修養像を展開したことが判明した。

第四章「三蘇思想に於ける孟子の位置」は、北宋時代に贊否を繞って激しい論争を生じた

孟子の思想についての三蘇の見解を分析し、従來の見方に修正を迫った。

三蘇、特に蘇軾は、孟子に對して批判的乃至懷疑的な知識人の代表格であるという評價を受けてきた。しかし、この論調の形成は、性善説に蘇軾や蘇轍が同調しなかったことを南宋の朱熹や余允文が大きく取り上げて非難した結果である。

第三章で論じたように、蘇軾兄弟は性善説に對して懷疑的立場をとった。性善説は孟子の理論の中でも中心的な位置を占めていることから、性善説への賛否は孟子に對する態度として重要な位置を占めることは事實である。しかし、朱熹ら道學一派がこのことに関して蘇軾を強く批判する背景には、後天的に聖人になることを説く道學の理論體系に於いて性善説がとりわけ重要な意味を與えられているという事情により、性善説への賛否に敏感にならざるを得ないことに起因する面もある。

蘇軾たちを非孟派に單純に分類する評價を一度保留し、蘇軾たち自身の發言に基づいてその孟子への考えを分析したところ、彼らが実際には孟子の書を學習對象として大いに重んじ、孟子の思想を元に様々な議論を展開していたことが判明した。蘇洵は『孟子』の文學的價値を非常に高く評價し、孟子を韓愈や歐陽脩に並ぶ文學者と見る。また、思想方面でも、『諡法』を改訂した際、多く『孟子』中の言葉に基づいて諡を定めており、その影響を伺うことができる。その二子に於いても、蘇軾は孟子を禹と並べ稱しており、蘇轍は諸家の雑多な説を辨別するための柱として孟子を扱っている。蘇軾についてはその思想に於ける尊孟の側面に先行研究でも觸れられているが、それは三蘇全體に共通する一貫した思想的特徴であり、彼ら自身の言説に據るに、三蘇を非孟派と片付けてしまう見方は不適當である。

蘇軾兄弟の孟子に對する態度の中で注意すべきは、『孟子』を經書に昇格させる當時の思想運動の中で『孟子』昇格派の論理的根據として使用された「孔孟一致説」に類する議論が蘇軾たちに見られることであり、この事實は蘇軾たちが北宋當時の思想界の動きと聯動しつつ孟子についての議論を展開したことを示している。

第五章「蘇轍『孟子解』に見るその歴史思想」は、蘇轍による『孟子』注釋書である『孟子解』の議論を分析し、蘇轍が孟子の内容を基礎として展開した思想を明らかにした。

『史記』への不満から『古史』を著すなど、蘇轍が歴史について深い關心を懷いていたことは既知の事實であるが、その『孟子』に對する注釋書である『孟子解』を分析すると、早期の蘇轍が歴史に關係する論點を『孟子』から多數見出し、独自の議論を展開したことが判明した。

『孟子解』に含まれる議論では、人々の欲求に應じて文明が漸進的に進歩する、という文明觀や、ある人が仁であるかどうかという道德性と天下を得られるかどうかという結果は無關係である、という歴史觀が示されている。こうした蘇轍の議論に對しては、朱熹や員興宗といった南宋期の人々から賛否入り混じった反應が示されており、南宋思想界に於ける蘇轍の位置を探る上で意義深い。とりわけ後者は北宋期の正統論争と密接に關わるものであり、王朝の正統性に道義性を結びつけるべきとする章望之に反駁して歐陽脩を擁護した

蘇軾の議論と軌を一にするものである。正統論争に於ける蘇轍の主張の理論的支柱として『孟子』が利用されていることは、孟子思想への賛否が大きな話題となっていた北宋時代の士大夫たちの具体的な『孟子』受容の多様性を示唆している。

また、上述の思想との關聯で注意されねばならないのは蘇轍の陳仲子批判の論理である。廉潔を厳しく求めるあまり母や兄を捨てた陳仲子の行爲に對して、それを道德性の面から批判する趙岐らの従來の説と大きく異なる判斷軸を蘇轍は示した。蘇轍は陳仲子の振る舞いは確かに清廉を貫いているが他者の模範とならないところに問題がある、と指摘する一方で、その道德性については不問に附した。こうした蘇轍の態度に通底する、絶對的尺度による善惡の設定、それに基づく批評を避けようとする姿勢は、蘇軾「揚雄論」（『經進東坡文集事略』卷八、『應詔集』卷十）に示された善惡の定義と共通しており、三蘇の思想の重要な要素として注視すべきものである。

以上の五章の論考を踏まえて三蘇經學思想全體が中國史上如何なる意義をもつか考える際、想起すべきは、序章第二節に引いた諸橋轍次氏及び劉復生氏による指摘であろう。諸橋氏は北宋中期の士大夫が經書の字句の解釋よりも人格向上に目を向けていた點について述べ、また、宋儒の學問と「内聖」「外王」との距離に着目した劉氏は、蘇軾らの時代に在っては儒學を統治に役立てようとした「外王」の要素が強く、その後道學諸儒により「内聖」の要素が強調されていった、という全體的な見立てを示した。

序論第一節（一）「經學の主觀的性質」にも述べたように、唐代を貴族の時代、宋代を士大夫の時代、という單純な圖式を描くことは戒めねばならないが、きわめて大まかに時代の風潮を概括した時、唐代末期に起きた貴族政治の崩壊に伴い、知識人社會が個々の知識人に對して家柄よりも個人の能力や考え方を問おうとする傾向が強まったことは事實と見てよかろう。その流れの中で、唐代から宋代にかけて、儒學は個人の内面に深く關わることとなった。

儒學の實質的内容を規定する經書から個人の生き方や政治の實務に於ける教えを読み解く試みが推進され、その結果、經書に對する注疏と異なる新しい解釋がとりわけ盛んに興ったのが三蘇の生きた北宋中期という時代である。三蘇の學術に於いて、たとえば『東坡書傳』が北宋後期の社會の現實上の問題を解決するための參照對象としての役割を『尚書』に賦與したことは、まさにそうした新たな經學の在り方の反映であった。

三蘇は北宋の士大夫たちに共有される問題意識を踏まえ、それら諸問題に對して彼らだからこそ可能な柔軟な思考、佛教などを踏まえた觀點に立脚して獨自の解を提示した。とりわけ彼らの『尚書』解釋に顯著であった、經書に示された内容を直接政治に應用しようという態度は三蘇經學の一つの重要な特徴であるが、それと同時に注意すべきは、もう一つの宋代經學の重要な要素である個人の修養の問題にも三蘇が目をつけていることである。

經書を通じて修養を考える言説がとりわけ多見する蘇轍『孟子解』や、文集に收められる様々な論に於いて三蘇が性情論を展開したことは、その結論は程頤ら洛學の一派と異なる

ものの、個人の修養に目を向けた點に於いてやはり宋代儒學がもつ同一の歴史的な脈を踏まえたものであると見られる。

修養の方面で特に注意すべき三蘇の説は、本研究では主として第三章で論じた性無善無惡説であり、とりわけ蘇軾に於いて未發の性への回歸を説く李翱以來の風潮への疑問が表明されている。この傾向は南宋以降あまり顧みられなかったのだが、自身の人格の涵養という問題に直面した北宋當時の士大夫たちが種々の議論を展開する中で、後の朱子學に繋がる性善説を前提とした人間觀に一石を投じた點できわめて重要な意味をもつ。蘇軾兄弟が表明した性無善無惡説の根底には、蘇軾「揚雄論」に見える、善惡の判斷に絶對的基準があると考えず、社會と共有可能か否かによって善惡を定義しようとする思想が関わっているものと考えられる。このような善惡觀は、同時代人からも縦横家的だといわれた蘇軾らの思考の特徴と根本的な繋がりを有すると見るべきであり、三蘇の思想の中心的要素の一つである。

三蘇に於いて經書は、王朝統治の方法を提供するものとして捉えられているのみならず、彼らの人間觀、ひいては修養の在り方についての思考の源流ともなっている。歴史的に見るならば、三蘇が經學を通じて示した思想は、後の朱子學に於いて經學の重點が個人の修養に移ってゆく全體の流れに於いて過渡期的位置を占めるものと位置づけることができよう。

また、彼らの學説が王安石による改革や、歐陽脩の議論に端を發する正統論争といった同時代の諸問題と密接に關聯していたことは三蘇思想の歴史的な位置を考える上で重視すべきことである。蘇軾は王安石の新法に反對するに当たって、その反對の根據を屢々『尙書』に見える聖賢の議論に求めた。蘇軾は弱者である民を慈しみ、政策を強行するのではなく言論による説得を行う君主像を『尙書』から読み取り、彼が不適切と考えていた王安石の態度に對比させた。蘇軾は『孟子』を解釋するに当たって政治上の成敗と道德性との間に關聯は存在しない、という主張を行ったが、それは蘇軾の正統論争上の主張を擁護し、學術的な根據を與えるものであった。

蘇軾らの個性は、それを肯定的に見るにせよ否定的に見るにせよ、常識から外れた、奇抜なものとして認識される傾向が強い。しかしながら、そうした個性の多くは、本研究で分析してきたように、當時の社會に於いて強い權威を有した儒家經典に彼らが向き合い、經學的な解讀を加えた結果として産み出された思想的成果であった。そして、そのような經學的議論に立脚したものであるからこそ、同時代や後世の人々に大きな衝撃をもって迎えられ、彼らの名を高からしめたのである。

しかしながら、ではなぜ文化人としてこの上ない評價を得た蘇軾らによる蜀學は學術界に於ける主流の地位を確立することなく、同時代の程頤やその後學による道學の陰に埋没することとなったのであろうか。思うに、上述のように、北宋諸儒の新たな學問の背景には、貴族政治の崩壊に伴う家からの個人の獨立が存在する。如何に生きるべきか、また、朝廷で如何なる政策を主張すべきかが個々の士大夫に問われるようになる中で、道學一派は、人間が後天的修養によって聖人へと到達するための道筋を具體的に示した『禮記』大學篇と、萬

人が善となる可能性を唱えた性善説とを組み合わせ、理解しやすい修養の道筋を示すことで士大夫階層の支持を得、結果として朱熹の生前既に大規模な門人集団を形成するに至ったのである。

翻って三蘇の主張を見るに、經書解釋に於いては普遍的な心性の追求よりも個別の問題の解決に注力しており、また、とりわけその性無善無惡説に立脚した人間觀は、道學に於ける性善説と大學八條目との聯繫のような理解しやすい道筋を他の士大夫たちに示すことはできず、おそらく蘇軾ら自身もそのことを欲求していなかった。彼らの詩文が表現上の優れた點から多くの模倣者・追隨者を生んだ一方でその經學思想が道學に壓倒されることとなったのは、蘇軾ら自身の學術上の態度から導かれる自然の歸結であった。